

FD NAGASAKI JUNSHIN CATHOLIC UNIVERSITY Newsletter

第2号

長崎純心大学 教育開発推進委員会

発行日 2013(平成25)年11月1日

〒852-8558 長崎市三ツ山町235 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894

目次:

- グローバル化に対応した教育の模索 2
ASEACCU (アセアック) の参加
IPC 国際プロジェクトについて
提言: 基礎教育としての英語教育について
- カリキュラムポリシーの再構築 4
比較文化学科
現代福祉学科
人間心理学科
英語情報学科
児童保育学科
- 教職員 FD 研修会報告 6
2012 (平成24) 年度 教職員 FD 研修会の概要
- 2013 (平成25) 年度 SD 委員会活動報告 7
- 教育開発推進委員会活動報告 8
編集後記

大学の「内部質保証システム」について

人文学部長 荒木慎一郎



大学は真理を探究し、伝えることを固有の使命とする。それぞれの大学は、大学の固有の使命と自らの大学の建学の理念に従って、学生に真理を伝える教育を実施しなければならない。同時に各大学は自らの行う教育が、大学の固有の使命や建学の理念に適ったものであるかどうかを常に振り返り、それが真理探究・伝達の府として適切なものであるかどうかを検証しなければならない。

各大学は自己点検・評価を通して、自らの教育の適切性を検証する。なぜ「自己」点検・評価なのか。大学は政治社会から独立性を保たなければならない。それは真理が政治社会である国家を超越するからである。これが大学の自主性・自律性の究極的な根拠であると同時に、大学の評価が外部によるものでなく、大学の内部で行われる自己点検・評価でなければならない所以である。

自主性と自律性に基づいて点検・評価を行う大学は、その評価に基づいて大学教育の質を継続的に維持・向上させるシステムを、大学の内部に有していなければならない。近年盛んに言われる大学の「内部質保証システム」の構築は、このような意味に解釈することが必要であろう。

大学基準協会による認証評価は、第三者評価として、外形的には「外部」からの評価であるが、そのねらいは、各大学が自らの理念・目的に基づいて行う自己点検・評価の信頼性と妥当性をチェックし、各大学の内部質保証システムがうまく機能するよう援助することにある。その意味で、大学基準協会による認証評価は、各大学の内部質保証システムの重要な要素であると言える。

しかし大学基準協会による7年に1度の評価は、たとえそれが各大学の教育の質の維持・向上に大きく貢献するものであっても、内部質保証システムの核ではありえない。内部質保証システムの核となるのは、自らの行う教育を不断に振り返り、「真理の探究と伝達」という大学の使命に基づいて、新たな改善へとつなげていこうとする一人ひとりの教職員の意志とそれに基づく営みである。もって自戒の言葉としたい。



公益財団法人大学基準協会
大学評価適合認証



グローバル化に対



ASEACCU (アセアック) の参加

国際交流委員会委員長 **勝 俣 好 充**
(英語情報学科教授)

国際交流委員会委員 **久 保 玲 子**
(学部事務室室長)

8月22日(木)から25日(土)までの4日間、韓国カトリック大学で「第21回 ASEACCU (東南・東アジアカトリック大学連盟) 国際会議」が開催された。本学からは、学内公募で選ばれた英語情報学科2年・山下五奈さん、同3年・戸屋春香さん、国際交流担当久保室長の3名が参加した。ASEACCU (アセアック) は Association of Southeast and East



Asian Catholic Colleges and Universities の略で、オーストラリア、インドネシア、カンボジア、タイ、フィリピン、台湾、韓国、日本のカトリック大学から成り、本学はグローバル化に対応した教育の一環として、2011 (平成23) 年度に加盟している。

会議には、加盟の44大学から学生82名、教職員79名、その他関係者などあわせて約200名が参加した。

今年のテーマは「新たな情熱、新たな方法、新たな表現-新たな福音化のためのカトリック高等教育の使命」。カトリックの精神を日々の教育、学生生活、社会生活の中でどのように実践していけば良いかということについて講演や発表を聞き、グループディスカッションで他の参加者たちと意見交換を行った。4日間のプログラムを通して、テーマへの理解はもちろんのこと、様々な国籍の学生や教職員と「カトリック大学の学生・教職員」という共通項を意識し交流を深められたことは、貴重な経験、財産となった。



IPC 国際プロジェクトについて

英語情報学科教授 **鈴 木 千 鶴 子**

グローバル人材育成のためのカリキュラム外の活動として、学生参加による国際プロジェクトを毎年実施し4年度目となる今秋参加学生の延人数は60近くに達する。本プロジェクトは、ドイツの姉妹校アイヒシュテット・カトリック大学で2004 (平成16) 年に開始されて以来成長を続け、昨年度は世界6ヶ国8大学から本学の19名を含め100名を超える参加を得た。

内容は、「子どもの見方・感じ方を知る」の共通テーマで、トピック別に国籍混成グループに分かれ、インターネット上で英語で意見交換しながらプロジェクトを遂行するものである。目的は、プロジェクト名 IPC (International Project Competence) が示すように、世界各地の大学生、とりわけ次世代に生きる子ども達を指導する教師を目指す学生に必要な「国際プロジェクトを遂行する協働作業力」を育成することである。

本活動を実践する中で参加学生たちが駆使しなければならないインターネットと英語力の伸長については、際立った変化を認めてはいないが、プロジェクトを通して必要とされる以下の3要素と5つの具体的項目の育成には、否が応でも意識が高まってい

ることが観察されている。これらの要素は、「グローバル人材育成推進会議」が提唱する目標と重なるものである。ただし、国際プロジェクトでは、グローバル人材育成の目標レベルでも上位の「二者・多者間の折衝・交渉」の力が求められることから、今後は、英語力育成ならびにテーマに関する専門性を高めるカリキュラムとの連携が課題であろう。

3要素

- (1) 語学力・コミュニケーション能力
- (2) 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感
- (3) 異文化理解と日本人としてのアイデンティティ

5つの具体的項目

- ① 幅広い教養と深い専門性
- ② 課題発見・解決能力
- ③ チームワークとリーダーシップ
- ④ 公共性・倫理観
- ⑤ メディア・リテラシー

応じた教育の模索



提言：基礎教育としての英語教育について

英語情報学科学科長 畠山 均

本学人文学部が掲げるディプロマポリシーの一つに「自らの考えを表現するとともに、他者との意思疎通を図ることのできる言語能力を有する」とある。このポリシーは本学の教育が日本人同士はもちろん、異なる文化に属するさまざまな人々とコミュニケーションすることができる「言語能力」の修得を目指しているという事である。ここで言う「言語能力」の中には日本語、英語、英語以外の外国語の能力も含まれるが、本稿では英語教育に焦点を当てる。またここで述べることは本学の外国語教育を担う部署等で議論されてきた内容ではなく、あくまでの個人の私案であること、さらにここでは英語教育の方法と内容を中心に述べるが基礎教育としての英語教育が目指すべき具体的な目標については関係部署でしっかり議論され設定されるべきである事を最初に申し添えておく。

《外国語教育の基本方針案》

今日の第2言語習得研究の成果を踏まえ、本学の外国語教育は次の3点をその基本方針とすべきと考ええる。

1. 読む・書く・話す・聞くの技能別ではなく4技能を統合した内容とする。
2. できるだけ大量のインプット（読む・聞く）を与え、その上で継続的なアウトプット（話す・書く）を促す方法とする。
3. できるだけ学習者（学生）の学習志向性に合った教材を用いる。

《現状と課題》

本学の学部共通基礎教育における外国語科目の卒業要件単位数はそれぞれの学科の教育目標の違いから同一ではない。特に英語情報学科と他の4学科（比較文化学科、現代福祉学科、人間心理学科、児童保育学科）とでは科目構成もその内容、方法も大きく異なる。ここでは英語情報学科以外の4学科の現状と課題について述べる。

この4学科では1年次におけるEnglish Reading I・II、English Communication I・IIの計4単位が学部共通の必修科目であり、これら4科目がコア英語科目と言ってよい。他にはGrammar、Sound Production、TOEIC、English Discussion、English Writing、Academic Readingsなど12の選択科目が開講されている。

English Reading I・IIにおいては「読む・書く」が、English Communication I・IIにおいては「聴く・話す」が主たる内容であり、これは技能別クラス編成と言ってよい。入学当初のプレイメントテストの結果を基にした習熟度別クラス編成で実施し、それぞれに共通教材を使用し、同一の成績評価基準

を用いている。しかしEnglish Reading I・IIとEnglish Communication I・IIの間には内容的関連性は一切ない。テキストはそれぞれの学科の学生の志向性を考慮して選択されているわけではなく、年間を通して1冊のテキストを終わらせる事が目標で、読む・聞くというインプット量は限られている。

また選択科目もコア英語科目との内容的、方法的関連性が考慮されて開講されているわけではない。

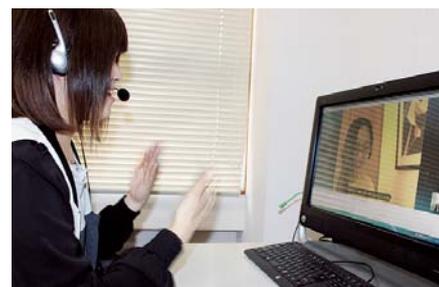
《改革案》

以上のような現状は先に述べた基本方針案とは大きく異なる。そこでより効果的な英語教育を実現するために基本方針案に添った次の3つの改革案を提案する。

1. English Reading と English Communication の再編成。一方をインプット重視の「読む・聴く」内容に、片方をアウトプット重視の「話す・書く」内容に再編成する。
2. English Reading と English Communication の内容的連携を深め、両者合わせて、4技能を統合した内容のクラス編成とする。大量のインプットを与えるために教室外での学習を促進するためにオンライン教材を使ったe-learningを推進する。
3. それぞれの学科の学生の志向性を重視した教材を選ぶ。

《英語情報学科の現状》

英語情報学科は2013（平成25）年度より基本方針案に添った新カリキュラムがスタートした。ここで詳しく説明できないが、これまでの技能別クラス編成ではなく4技能を統合した科目をコア科目として位置づけ、多くのインプットを与えるためにインターネットを利用した授業を展開している。さらに継続的なアウトプット（特に話す）を促すためにインターネット電話Skypeを利用したオンライン英会話サービスを提供する会社と提携し、スピーキング力の向上を図っている。



カリキュラムポリシーの再構築

2008（平成20）年12月に出された中央教育審議会答申「学士課程教育の構築に向けて」では、我が国におけるこれからの大学改革において最も重要なのは、各大学が教学経営で「学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」「入学者受け入れの方針（アドミッション・ポリシー）」を明示することであると指摘されている。これを受けて本学においても、様々なレベルで三つの方針についての見直しが図られ、大学教育の構築へ向けた取組みが始まっている。今回、各学科において「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」が、どのように見直され、構築されたかについて報告する。

比較文化学科

比較文化学科教授 宮坂正英
(教育開発推進委員会委員)

カリキュラム改編に際し、比較文化学科では新たに以下のようなカリキュラム・ポリシーを定めた。

まず、学科の性格上、基礎科目には文化の普遍性と多様性を学ぶ方法と基礎的な学力を身につける科目を中心に配置することにし、基幹科目は必修科目と選択科目を明確に分け、前者では比較文化を学ぶすべての学生に必要な知識と学力を養う科目を配置し、選択科目ではそれぞれの学生の興味、関心にあった科目を地域、時代、テーマなどにより、個別に幅広く配置することにした。

さらに基幹科目を「歴史・社会」「思想・芸術」「言語・文学」領域に分け、相互の関連性に配慮しながら総合的に学べるよう科目を配置し、応用科目の卒業論文へとつながるよう配慮した。

また、大学の地域的特性を生かし、文化の交流地としての長崎の文化や歴史を学べる科目を配置した。

これ以外に、学生のニーズに合わせて資格・免許を取得できるように、配当年次を工夫して、関連科目を配置することにも配慮している。

現代福祉学科

現代福祉学科准教授 米倉幸生
(教育開発推進委員会委員)

現代福祉学科では、「人間の尊厳に基盤を置き、人権や福祉の理念に則った教育を行い、福祉分野において実践する人材の養成を目的」とするディプロマ・ポリシーを念頭に、本学科における教育課程編成と実施の方針であるカリキュラム・ポリシーについて、次のように定めている。すなわち、①専門職養成のため社会福祉コース（保育士養成課程を含む）と介護福祉コースを設定し、各科目群について②基礎科目は、幅広く深い教養と総合的判断力や人間の尊厳に基盤を置く豊かな人間性を涵養するものを配置してあること、③基幹科目は、4種の科目群（・国家資格取得関連の専門科目・ソーシャルワーク系科目や心理、教育その他の専門科目・少人数制による実習科目・少人数制による演習科目）の連動性を視野に入れて編成し、福祉に対する深い理解、理論と実践との統合に基づく質の高い実践力や課題解決能力の習得するものであること、そして応用科目は、福祉に係る様々な事象の客観的認識と言語化、それらを公表する能力を培うものであること。

カリキュラム・ポリシーの明確化によって、在学生在が自らの学びの意味と培われた能力が福祉だけでなく多くの領域で活用できることを理解してより質の高い学びに発展させるきっかけとなり、本学科の人材養成のあり方が学外から理解されるきっかけともなることが期待される。

人間心理学科

人間心理学科准教授 岡嶋一郎

人間心理学科のカリキュラム・ポリシーを作成するにあたり、まず心理学的見地から対人援助および産業・社会に貢献できる人材養成を行うという本学科の目的に沿うよう、「心理学共通領域」と「心理学の基礎と研究方法」に必修科目があること、実践的知識を得る場として「臨床心理系」「産業・社会心理系」「関連領域」があることを意味づけた。

次に、学生が4年間の集大成である「卒業論文」に取り組むまでに、①課題設定の基礎となる幅広い知識と問題意識の醸成、②課題解決と論文執筆の基礎となる研究法の理解と情報処理・文章表現力の向上の2系統による学修支援が必要であると分析し、前者は主に基礎科目の基礎教養分野や基幹科目の講義科目に、後者は主に基礎科目の情報・文献分野や言語文化・コミュニケーション分野、基幹科目の「心理学の基礎と研究方法」に属する科目に、それぞれ教育的役割を持たせた。

今後はカリキュラム・ポリシーに従って、カリキュラム系統の図式化、可視化を行っていきたいと思います。

英語情報学科

英語情報学科教授 滝澤修身
(教育開発推進委員会委員)

英語情報学科のカリキュラム・ポリシーは、2012（平成24）年4月に開催された第一回学科会において発案された。その後、数回の学科会の審議を経て、最終的に、2013（平成25）年1月に開催された教育運営委員会で審議を受け、決定された。

本学科のカリキュラムは「英語」と「情報」の的確な運用能力、及び知識と教養に基づく広い視野と柔軟な思考力を持った学生を育成することを目的とし、次の7科目群で構成される。すなわち「英語コミュニケーションスキルの向上を目標とする科目群」、「情報コミュニケーションスキルの向上を目標とする科目群」、「英語による情報収集及び情報発信スキルの向上を目標とする科目群」、「コミュニケーションの理解を目標とする科目群」、「言語と文学の理解を目標とする科目群」、「グローバル社会の理解を目標とする科目群」、「関連科目群」である。

今後の教育の改善点及び発展の展望は、主に、次の4点である。(1)英語の「話す」「聞く」「読む」「書く」の4技能を、ネイティブ教員が少人数クラスで集中して教育する。(2)情報処理に関する基礎技能を全学生が習得できるようにした上で、英語とITを融合した科目では、英語による情報発信を実践する。(3)国内外のグローバル化社会の現状をふまえ、歴史、言語、文化、人間のコミュニケーションについての幅広い知識及び教養を修得する多くの科目を開講する。(4)本学科の全教員がキャリア支援に当たり、学生のキャリア意識を高め、大学で培った知識及びスキルをどのようにグローバル化した現代社会で活かしていけるかを共に考える。

児童保育学科

児童保育学科教授 坂本雅彦
(教育開発推進委員会委員)

児童保育学科では、カリキュラムの今までの編成方針を見直し、これを計6項目のポリシーとして明文化した。以下の三点にまとめる。

- (1) 保育士、幼稚園教諭及び小学校教諭の養成を行う学科として、また、日本モンテッソーリ協会認定のモンテッソーリ教員免許状を取得できる学科として、必要な教育課程の条件を整えること
- (2) 「理論的探究力」と「実践力」の両者がバランスよく培われることを意図したカリキュラムを編成すること
- (3) 乳幼児期から学童期までの、一貫した人間形成への広い視座を全学生に培うことを意図したカリキュラムを編成すること

(1)では、職業上の専門性はもとより、子どもたちから「先生」と呼ばれるに相応しい人間性や倫理性が本学科の教育を通して養われるという点が重要である。(2)の点は、理論的探究を通じて実践を磨き、実践を通して理論的探究も深まるといった理想的なサイクルの確立を問題としている。(3)は、子どもの発達と保育・教育についての基礎的理解を、どの学生も、取得する免許資格の種類に関わりなく共有しうることを保証するものである。

学科では今後、これらの諸点に照らして絶えずカリキュラムを点検し、さらなる改善への努力を続けていく所存である。

ひといき

授業アンケートとの 付き合い方

教育開発推進委員会委員
足立 耕平
(人間心理学科講師)



学生から授業についての評価を受けるという授業アンケートが始まった当初は、いったいどんな結果になるのか不安に思っていました。慣れてくると結果が楽しみになってきました。というのも、やはり学生からの反応というのは講義を振り返る参考になるんですね。特に自由記述で書かれた内容を見てみると建設的な意見が多く励みになります。ただ、「先生の声で眠くなります」といった記述もあり、どうしたものかと悩むこともあります。抑揚をつけて話しをせねばと思うのですが、習慣を変えるのは難しく、ここ数年「声で眠くなります」と書かれることが続いています。最近ではもういっその事、私が話す時間を少なくして学生主体で授業をさせようかなどと目論んでいます。以前にFD研修会で学んだ「橋本メソッド」など実践してみたいと思っています。

このように授業アンケートを参考にしていますが、アンケートだけでは教育効果を十分に測定できていないとも思っています。というのも内田樹氏が述べているように、教育の効果は数年経過した後で本人も意識できない形で表れてくることがあると思うからです。授業アンケートといった短期的な視点だけではなく、より長期的な教育の効果にも注意を向ける必要があると考えています。このように私にとって授業アンケートとは気になる存在でもありつつも、ほどよい距離感でお付き合いしたいと思う存在です。

教職員 FD 研修会報告

2012(平成24)年度 教職員 FD 研修会の概要

教育開発推進委員会委員長
石田 憲一
(児童保育学科教授)

〔テ ー マ〕 原点をみつめ、より新しく

〔日 時〕 平成25年3月6日(水) 10:30~14:40

〔開会挨拶〕 学長 片岡 千鶴子

〔講 話〕 長崎純心大学の原点を見据えて

〈講師〉古巢 馨 氏 (長崎純心大学人間心理学科教授)

〔講演・ワークショップ〕

アクティブラーニングを始めてみようー橋本メソッドの実践からー

〈講師〉金西 計英 氏 (徳島大学大学開放実践センター教授)

本学では毎年3月に全教職員参加の教職員研修会を開催している。その目的は、日常の教育研究のあり方を自己点検するとともに、高等教育を取り巻く社会・教育環境についての知見を深めることである。

2012(平成24)年度の研修テーマは「原点をみつめ、より新しく」であった。FD活動において、それぞれの大学における建学の精神の重要性が認証評価において特に指摘されるなか、改めて本学が設立された理念、目的を考えることが目指されたのである。

午前中はまず、片岡千鶴子学長より開会の挨拶があり、ジャックマリタンの思想における教育目的の重要性に触れられ、日々の教育実践を常に、教育目的と照らし合わせることの意義についてお話があった。

古巢馨先生から「長崎純心大学の原点を見据えて」というテーマでの講話をいただいた。現在、我が国の大学が置かれている厳しい現状のなかで、我々はいかに歩むべきかについて話される中で、果敢に様々なことに挑戦しているある私立高等学校の取り組みが事例として紹介された。また、初代学園長、江角ヤス先生が初めての卒業生を送る際、話された式辞も紹介され、改めて創設者が教育にかけた情熱を共有することができた。

午後からは、徳島大学大学開放実践センターの金西計英先生から、「アクティブラーニングを始めてみようー橋本メソッドの実践からー」とのテーマで講演及びワークショップをしていただいた。このテーマは、これまで行われてきた本学の学生による授業アンケートの結果から、履修生が多い授業でいかに学生が満足するかが、FDにおいて大きな課題となっているとの認識のもとで行われたものである。この講演、ワークショップを通して、学生一人一人との、普段の授業におけるコミュニケーションが、いかに重要であるかを知ることができた。



《古巢先生の講話の感想》

- * カトリック大学の使命をより具体的に理解することができた。特に「希望をさし出す」こと「魂の世話をする」ことの重要性を感じた。また、長崎純心大学の歴史に刻まれた深い伝統とその意味を見直すことができた。与えられた使命を自覚し、励みたい。
- * 純心学園に勤めている私たちの役割と使命を再確認することができた。教えるという教育ではなく、伝えていく教育の大切さを改めて感じた。純心で何を伝えようとしているのか、何を願っているのか自分自身に問いかけて勤めていくよう、心がけていきたいと思った。
- * 教育とは何か、また「純心大学」にて教育を行う意味、「純心大学」の役割について考えさせられた。「伝える」ことを念頭に授業をしていきたいと思った。
- * 「教えること」と「伝えること」の違いを考えさせられる話であった。純心教育は、教職員一体となって実現できるものであると感じ、それについての取り組みを考えていく必要がある。
- * とてもわかりやすく、純心の歴史を踏まえながらこれからのことについて話をしていただき、感銘を受けた。「人の命に不可欠な教育に携わる、召命を受けている」「教えることと伝えることは違う」など、神父様の一言ひとことが胸に響き、今後の自分のあり方について、とても考えさせられた。

《金西先生の講話・ワークショップの感想》

- * 具体的な方法を教えていただき、有益だった。文献購読1で応用できると思った。
- * 大変勉強になった。体験型の授業だったので、実感があった。
- * 100人以上の大講義は悩みの種なので、今回の講演でいただいたヒントのうちから生かせそうなものを今後ぜひ試してみようと思う。
- * パワフルな話運びで、とても楽しく新しい授業の方法を紹介してくださり、よかった。
- * 学生が主体的に学ぶことのできる環境を作ることも教員にとって大切な役割であるので、このような方法があるということを経験的に学ぶことができたことはとても勉強になった。
- * 「橋本メソッド」という授業の進め方があることを知り、授業に学生が主体的に参加するために様々な工夫が必要であること、また、研究していくことが必要だと感じた。
- * 100人単位の授業は担当していないが、演習を担当していて、学生を取り込んでいくことの難しさを感じているので、ゲームを取り入れることが参考になった。

2013(平成25)年度 SD 委員会活動報告

SD 委員会委員長 甲斐 秀二 (教務課課長)

2008(平成20)年12月の中教審答申の「学士教育の構築に向けて」の中で、大学職員の職能開発についての重要性が提言されました。本学でも、2009(平成21)年度よりSD委員会が発足され、今年で5年目となります。これまで職員の意識向上を目的に、様々なテーマを設定し、年2回のペースで研修会を行ってきました。



2013(平成25)年度第1回SD委員会の研修会準備のため、8月29日から30日にかけて、姉妹校である鹿児島純心女子大学と

鹿児島純心女子短期大学を視察訪問し、本学が抱える課題や問題点について聞き取りを行いました。今回の訪問の目的は、第一に姉妹校を訪問することにより、建学の精神や教育理念を共有しあい、純心教育の原点を確認すること、そして本学における業務に関する課題、問題点について、姉妹校での取り組みを聞き取ることにより、業務改善や効率的業務の見直しへと繋げていくことやSD活動を中心とする職員の資質向上のための具体的な取り組みを知ることにより、今後における本学でのSD活動や、更なる積極的、継続的な研修の実施に活かすことでしたが、姉妹校のご協力のもと、成果があげられたのではないかと感じています。また、鹿児島島の職員の方々の話を伺うなかで、大学職員としての職務に対する意識の高さと、純心教育を日頃から意識し、日々の業務を遂行されている様子が伺え、とても刺激を受けました。

鹿児島島訪問での聞き取りをまとめ、9月19日に行われた第1回SD研修会で報告を行いました。本学における現状の課題、問題点を共有し、それぞれが改善点を考え、今後の業務への参考とする機会をつくることができました。今後も姉妹校との情報交換を互に行い、交流を深めていきたいと思ひます。

18歳人口が今後ますます減少し続けるなか、大学の形も生き残りをかけて多様化しています。そのような中、教育研究の質向上や経営的な強化も含め、大学職員の役割はますます重要になってきていると思います。これからは、大学職員も教員とともに、大学教育について真剣に探究し、教育課程等への携わりや、学生への指導、助言ができる存在となっていかなければなりません。そのためには、自らの現状の業務だけに止まらず、大学業務におけるあらゆる知識、能力を身につけていくことが必要です。現状の域に満足することなく、常に危機感と目的を持って、業務に研鑽していくことが大切です。それを行うには、個々の職員の高い意欲や意識が基本になければならないことは言うまでもありませんが、実現するための環境や組織も必要です。SD研修の場は、我々大学職員が求められる能力や知識を伸ばすためのひとつの手段となりうる役割であればと考えています。2012(平成24)年8月の中教審答申の「大学教育の質的転換」のなかでも、「学士課程教育をプログラムとして機能するためには、教員だけではなく、職員等専門スタッフの育成と教育課程の形成・編成への組織的参画が必要…」とあるように、今後は、大学職員も大学教育や大学運営に携わる役割を求められる存在となります。次回のSD研修会では、大学職員がこのような役割を担っていく意義とは何か、また、役割を果たすために、具体的にどのような手段で、どのような関わりを持って取り組むことができるかをテーマに掲げ内容を検討していきます。



教育開発推進委員会活動報告

2012(平成24)年度 後期

■教育開発推進委員会

- 第3回 平成24年10月3日
- 第4回 平成24年12月12日
- 第5回 平成25年1月30日
- 第6回 平成25年2月13日

■学生による授業アンケート

- 前期 平成24年7月9日～7月28日
- 後期 平成25年1月21日～2月4日
 - * 教員へフィードバックアンケート実施
 - * 集計結果の公開 (ホームページ)

■教員相互による授業参観

- 平成24年11月5日～11月16日
 - * 教員へフィードバックアンケート実施

■教職員 FD 研修会

- 平成25年3月6日 10:30～14:40
 - * アンケート実施

■出張等

- * 平成24年8月31日～9月5日
 - 第2回大学コンソーシアム八王子FD・SDフォーラム
- * 平成25年2月23日～2月24日
 - 大学コンソーシアム京都「学生が主体的に学ぶ力を身につけるには」

2013(平成25)年度

■教育開発推進委員会

- 第1回 平成25年5月2日
- 第2回 平成25年10月16日

■学生による授業アンケート

- 前期 平成25年7月9日～7月28日

■出張等

- * 平成25年6月18日
 - ‘学力担保’としての検定試験活用策／英語編～大学入試・プレースメント・留学段階／大卒・院入試・就職段階において～ (地域科学研究会高等教育情報センター)
- * 平成25年10月25日
 - 教育の質保証セミナー ～質保証の方面からIRのあり方を考える～ (株式会社ハウインターナショナル)

図書・雑誌案内

※これらの本は、教育開発推進室で閲覧できます。貸出しを希望される方は、図書館で手続を行ってください。

■定期購読雑誌等

- 「高等教育研究」
日本高等教育学会編 玉川大学出版部発行
- 「IDE 現代の高等教育」 IDE 大学協会発行
- 「INTERNATIONAL REVIEW OF EDUCATION」
UNESCO INSTITUTE FOR LIFELONG LEARNING

■図書

- 「高大接続関係のパラダイス転換と再構築」
- 「高等学校学習指導要領 VS 大学入試」
- 「大学入試と高校現場—進学指導の教育的意義—」
東北大学高等教育開発推進センター編 東北大学出版会

編集後記

第2号では、「グローバル化に対応した教育の模索」「各学科カリキュラムポリシーの再構築」「教職員FD研修会報告」「SD委員会活動報告」など、本学が進めてきているFDの取り組みについて報告させていただきました。大学内外の方々と情報を共有し、ご意見、アイデア等を賜ることができたら幸いです。本誌の冒頭の学部長の言葉にもありました通り、自ら行う教育を不断に振り返り、『真理の探究と伝達』という大学の使命に基づいて、新たな改善へとつなげていく姿勢をこれからも大切にしたいと思います。

編集担当 石田憲一 坂本雅彦 米倉幸生 細田美恵

長崎純心大学 教育開発推進委員会

〒852-8558 長崎市三ツ山町235 TEL095-846-0084 FAX095-849-1894 URL <http://www.n-junshin.ac.jp/univ/>